

# 童話 小さい音楽家

山崎みつ子

今から百年ばかり前に、オーストリアにフランツといふ男の子がゐました。フランツはまだほんの子供でしたが、音楽が大層好きでした。そしてお父さんにせがんでピアノを買つていただきました。

そのピアノは悪い悪いピアノでした。何故ならフランツのお父さんは貧しい學校の先生で、樂器などに澤山のお錢を出すことはとても出来なかつたからです。

しかしフランツは不思議な子供でした。フランツの小さい指がすばしこく動き出すと、悪い悪いピアノから、いつでもうつむりするやうな音がするのでした。

或る日お隣りのヨセフ叔父さんがフランツの家に遊びに来て、フランツを大きな樂器店に連れて行かうと云ひました。そしてその店には大層立派なピアノが幾臺も幾臺もあ

る話をしました。だからフランツはその晩はさうしても眠れませんでした。

夜が明けるまで、フランツのお母さんは、二階に寝てゐたフランツに下から聲をかけました。

『フランツや、起きてるかい』

『ええ、起きてますよ。そしてもう着物もちゃん着てゐます』

フランツは元氣よくかう答えてとん／＼と降りて來ました。お母さんは思はずにこり／＼笑ひました。

朝飯もそこそこにすまして、フランツはヨセフ叔父さんミ一所に出かけました。樂器屋までは大分路のりがありました。そして幾度もなく立派な馬車が二人の肩に砂ほこりを浴せながら、威勢よく通り過ぎます、しかしフランツは

たゞもうピアノのこまばかり思つてぎんぎん路を急ぎました。ヨセフ叔父さんは背が低くて、肥つてゐましたので、顔を眞赤にして、息せきまいてついでに行きました。

やがて樂器店につきました。フランツはすぐに立派な一臺のピアノの前に腰をおろして、それを弾き始めました。この世の中には音楽ほど面白いものはないと言ふやうに、フランツの顔はうれしさに頭髮の根元までほつと紅くなつてゐました。

その時一人の紳士が店にはいつて來ました。そしてフランツが弾くピアノの音にちつと耳をすましてゐましたが、やがてヨセフ叔父さんの傍に行つて、いろ／＼にフランツのことを尋ねました。フランツは誰にもピアノを教はつたことがないが、ヨセフ叔父さんが言ひますと、紳士は考深さうだ、  
『さうですか。誰も教へないのでですか』  
と云ひました。

『え、さうでござんすとも、何しろ親父さんが何か新しいものを教へようとするに、その時には彼の譜はもう

ちやんごそれを知りぬいてゐやすからな。』

ご、ヨセフ叔父さんは自慢さうに云ひました。

紳士は小さい息をつきながら、獨言ひとりごとのやうに、

『確かに驚くべき子供だ』

とつぶや言ひました。それからヨセフ叔父さんの方を向いて、

『さうかあの子のお父さんに、明日の朝あの子をつれて私の家まで來るやうに云つて下さい。私は帝室合唱團長です。』

ご、云ひました。そしてその儘店を出ました。

ヨセフ叔父さんはあきれたやうな顔をしてその後姿を見つめてゐました。

フランツは一生懸命にピアノを弾いてゐましたので、二人がこんなことを話し合つたか少しも知りませんでした。

歸り途でヨセフ叔父さんが今迄のこごを話しますと、フランツは可愛い目をまんまるくしました。しかし何のために帝室合唱團長のうちによばれるのかわかりませんでした。

翌日フランツはお父さんにつれられて、帝室合唱團長の

家に行きました。團長はフランツをピアノの前に坐らせて  
いろいろな曲を弾かせました。そして一つの曲がおしまひに  
なる度に、小さい溜息をつきました。やがて團長は、フラ  
ンツのお父さんに

『フランツさんは、あとできつミ世界一の音楽家になりま  
す。さうでせう、私の家にフランツさんをお預りして、

音楽學校に通はせては？』

ミ云ひました。お父さんは驚いたやうな、嬉しいうやうな顔  
をして、暫らく黙つてゐましたが、やがて、

『あなたさへおよろしければ、私には異存はございませ  
ん。』

ミ答えました。

みなさん、これが世界で名高い、オーストリアの音楽家  
フランツ・シューベルトの子供の時のお話です。

## 象の涙

—上野動物園にて— 蚊 痛 二

象が嘆いていふことにや

花咲く園さあこがれて

來たのを乃公はうらみす

今ちや尼柳三十年

ここに咲きます心の花。

象が嘆いていふことにや

情の果のなる國さき

慕ひ來たのがあたとなり

黒痴の泪に故郷の

舊友の片影がうつります。

象が嘆いていふことにや

はやをいぼれたこの老齡ぢや

暴れも逃げもなりません

歩んでみたい二歩三歩

けふもなみたの日がくれる。